【旧約聖書の歴史】

by 小鮒　實牧師

１. 旧約聖書の救いの歴史（救済史）

先祖に対する神の約束（アブラハム、イサク、ヤコブ）　(創 12-36 章)
↓　　（イスラエル）
出エジプト（モーセ）(前 1275?) ラメセスⅡ世(前 1290-1224)の時代(出 1-15 章)
│ 出エジプトという出来事によって、初めて民族として具体的出発。
│ （この時、モーセを通してヤハウェの名を知らされた 出 3:14f.）
│ 神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」 神は、更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主（YHWH）がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名　これこそ、世々にわたしの呼び名。(出3:14-15)
│ ※「わたしはある（エフ(ヒ)イエ）。わたしはあるという者だ」（わたしは有って有る者)
│ （ I　AM; that is who I am.）　＊「わたしはある」＝存在の根底
│ ※ 主（YHWH）（JEHOVAH(英)　ﾔﾊｳｪ、ヤーウェ、ヤーヴェ）
│ 先祖を導いた神として受容(出 3:6 、15)
↓　「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主」
シナイの契約　(出 19-40 章、レビ記→民数記 10:10)
│ 諸部族はシナイ山において、ﾔﾊｳｪ（ヤーウェ）の名を中心に結合。
│ 民族としての新しい出発。イスラエル→ヤハウェの民　ﾔﾊｳｪ→ｲｽﾗｴﾙの神
│ 十戒(出 20:1-17)　契約の書(20:22-23:33)
↓　(申 5:6-21)　祭儀的十戒(出 34:10-28)→熱情の神(ねたむ神)
荒野の旅　（不平を言う民）出 16 章、民 11 章
↓　カナン偵察→不信仰→ 40 年延長(民 14:34)
カナンの土地取得(前 1250-1225?)　「乳と密の流れる土地」(出 3:8 、申 26:9)
（ヨシュア）「土地」→神からの「嗣業の土地」(ﾖｼｭｱ 13-14 章)

◎この歴史がイスラエルの基礎　　（モーセ五書 → 六書）
◎イスラエル民族は、これらの出来事を神の導き、救いの歴史であると信じ
　彼らの信仰告白として語り伝えた。
◎カナン定着から、イスラエル民族の具体的な歴史が始まる。

用 語 解 説（聖書のうしろ））

◆主（しゅ）　旧約聖書中，イスラエルの神は種々の名称で呼ばれており，そのうち最も多いのがいわゆる神聖四文字 YHWH（6500 回以上）である。この語の正確な読み方は分からないが一般にヤーウェまたヤハウェ（文語訳ではエホバ）と表記されている。この神名は人名の末尾に「ヤー」という短い形で付加されることが多い（「イザヤ，エレミヤ」など)。「YHWH」という名前の意味について聖書には様々の暗示が見いだされるが，空虚な神々とは違って実際に「存在する者」，行動的に人々とともにいて，彼らに援助を与え，「現存する者」という意味が最も重要であ

ると思われる。後になると，神に対する畏敬のゆえに、この名は口にされなくなった。その代わりに神聖四文字は「アドーナイ（主）」と読まれるようになり，この読み方が 70 人訳のギリシア語聖書にも導入されて「キュリオス（主）」と訳された。使徒たちは，特に，復活して父の右にあげられたイエスを指すためにこの「主」という称号を使用した（フィリ 2：11 など）。なお，預言者が度々用いる「万軍の主」という呼称は，森羅万象，特に天の軍隊と考えられていた星辰（せいしん）（星・天体）を統べ治める全能の神を表している。

◆族長（ぞくちょう）　イスラエル民族の祖先。アブラハム，イサク，ヤコブを指す。　ヤコプの 12 人の息子がイスラエルの十二部族の祖となった。

◆契約（けいやく）　この語は旧約聖書だけでも 280 回以上も使用され，イスラエルの宗教思想の軸となると同時に、旧約と新約とを結ぶ重要な橋渡しともなっている。　そもそも「新約」とは、モーセを通して結ばれた神との契約に代わる「新しい契約」という意味だからである。古代オリエント世界においては、二つの民族、もしくは，二人の人間を最も堅く結び付け，円満な関係を持たせるものが契約であると考えられていた。聖書は．人間どうしの契約について度々言及しているが（創 21：25 以下など）、それ以上に，人間を神のものとするために神が全く自由に結ばれた契約について語っている（創 9：8 以下、17：1 以下）。その中で最も基本的なものは、シナイ山のふもとで結ばれた「シナイ契約」（出 19 章，24 章）とダビデ王朝の永遠性を約束した「ダビテ契約」（サム下 7 章）である。しかし民が契約の条項（十戒）を守らなかったので、神は「新しい契約」（エレ 31：31 － 34）を結んで，人間との関係を正し、完成することを約束された。
この約束がイエスの死によって実現され（マコ 14：24，ヘブ 9：15），新しい契約（新約）の時代が始まったのである。

◆契約の箱　（けいやくのはこ）　　神はイスラエルと契約を結ばれたが，そのしるしである十戒を刻んだ 2 枚の石の板を納めた箱（申 10：1 － 5）。純金で覆われた木製の箱であったといわれる。ソロモンが神殿を建てたとき，この箱を至聖所に納めた記録があるが，ネブカドネツァルのバビロン軍が神殿を取り壊した後は所在不明（王上 8：1，ヘブ 9：4，黙 11：19）。

◆幕屋（まくや）　モーセがシナイ山で十戒を授与された後，神の命令に従って作ったテントの礼拝所。契約の箱が安置され，また神が現れてモーセと語らう場所になったので「臨在の幕屋」とも呼ばれた。イスラエル民族の荒れ野の旅に伴って移動した（出 25 章　民 9：15，使 7：44，黙 15：5）。

◆十戒（じっかい）原語では「十のことば」，通常「（モーセの）十戒」と呼ばれている。イスラエルの宗教生活の根底となっていたシナイ契約の条項で，神、他人に対する義務を規定している。しかし単に禁令を並べたものではなく，その底には，エジプトからイスラエルの民を導き出した神の選びの愛が流れている。　イスラエルは，その愛にこたえてその条項を守ることによって神の民となるのである。預言者は繰り返しこのことを力説し（ホセア 4 章など），イエスは山上の説教の中で十戒を含む律法についての新しい解釈を示しておられる（マタ 5：17 以下）。十戒の本文は出エジプト記 20 章と申命記 5 章に記載されている。

十　戒（新共同訳聖書）

わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。

1. あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。
2. あなたはいかなる像も造ってはならない。
   （あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神（ねたむ神）である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。）（出エジプト記20:5-6）
3. あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
4. 安息日に心を留め（安息日を守って）、これを聖別せよ。

（１－４、神についての教え・義務）

「イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが　最も重要な第一の掟である。」（ﾏﾀｲ22:37-38）　※敬神・神を愛する

5. あなたの父母を敬え。
6. 殺してはならない。
7. 姦淫してはならない。
8. 盗んではならない。
9. 隣人に関して偽証してはならない。
10. 隣人の家を欲してはならない。　（出エジプト記 20:2-17）（申命記 5:6-21）

（10. 隣人のものを一切欲しがってはならない。）　※（　　）申命記

（５－10、人間のあり方・人間関係を教えたもの）

「第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」（ﾏﾀｲ22:39-40）　※隣人愛・人を愛する

◆熱情の神（ねつじょうのかみ）　イスラエルの神の一つの呼び名（出 20：5，申 4：24）。神は契約によってイスラエルを自分の民とされたので，これを深く愛し，民が神に背いたときには罰を加えて彼らを正しい道に立ち帰らせようとする。神のこの激しい愛を聖書では「神の熱情」と表現する（エゼ 16：42，39：25）。

２. 士師時代（前 1220-1020 ?）　約 200 年間?　(合計 12 名の士師)

小家畜飼育者 → 自営農民……半遊牧民（大家族制）

契約共同体……イスラエル 12 部族連合の形成

バアル宗教との戦い

祭りの起源…三大祭り（過越祭、七週祭、仮庵祭 申 16 章）

・過越祭（除酵祭）アビブの月（春）酵母を入れないパンを７日間食べる

・七週祭（五旬節）小麦の収穫感謝祭、穀物の刈り入れから七週目

・仮庵祭（取り入れの祭り）秋の収穫感謝祭、７日間

部族連合……調停者…→士師(さばきづかさ)、カリスマ的戦士－対外敵

大士師(7 名)→オトニエル(士 3:7f.)、左利きのエフド(士 3:12f.)

シャムガル(士 3:31)、女預言者デボラとバラク(士 4:1f.)前 1120 年？

ギデオン(エルバアル(「バアルは自ら争う」の意 6:32))（士 6:1f.)

エフタ(士 11:1f.)、サムソン(士 13:1f.)

小士師(5 名)→トラ、ヤイル(10:1-5)、イブツァン、エロン、アブドン(12:8-15)

◆士師（しし）　本来は「裁く」という動詞の分詞形であるが（士師記 JUDGES)，「士師」と訳される場合は，イスラエルの歴史において，カナン占領から王国設立までの期間、神によって起こされ，イスラエル人たちを敵の圧迫から解放する軍事的，政治的指導者を指す。士師記には 12 人の名が挙げられている。

◆十二部族（じゅうにぶぞく）　イスラエル民族はヤコプの 12 人の子を祖先とする 12 の部族から成っていた。イエスはそのうちの一つ，ユダ族の出身であられた（ヘブ 7：14)。新約では.「十二使徒」を指導者とする教会が，神の民として新しい意味のイスラ工ルとなる（マタ 19：28，ヤコ 1：1，黙 21：12 ― 14)。

◆長老（ちょうろう）　イスラエルの部族制度の中で，家族、氏族、部族を代表し，それを取り仕切る任務を滞びていた（出 3：16，民 11：16)。一般に年輩者だったので,「長老」(「老人」の意）と呼ばれたが、年齢よりもむしろ高い身分を指している。後には王の顧問の術語となり（王上 12：6 など。100 回以上)，マカバイ時代以後は，国の最高法院の議員の一部を指すようになった (マタ 21：23, 26：3)。長老制は新約の教会にも取り入れられている (使 14：23, 1 テモ 5：17)。

◆主は生きておられる（しゅはいきておられる）　士師記 8：19，サムエル記上 14：39，45 などに見られる「誓い」という意味を表わす定まった言い方。「生ける主にかけて誓う」の意。神御白身が語られる場合には,「わたしは生きている J（民 14：21，28，イザ 49：18，エレ 22：24 など参照）となる。人間の命にかけて誓うこともある（サム上 1：26，サム下 14：19 など)。また，神と人間の両者の命にかけて誓う場合も見られる（王下 2：2，4，6，4：30 など)。

◆過越祭（すぎこしさい）　ユダヤ教三大祭りの一つで，イスラエルの民が神によってエジプトから救い出されたことを祝う祭り。エジプト人の長子と家畜の初子を滅ぼした神の使いが，イスラエル人の家を「過ぎ越し」たことに基づいた名称（出 12：23 ― 27)。ニサンの月の 14 目（太陽暦では 3 月末から　4 月初めごろ）に小羊を屠って焼き，種なしパンとともに食して祝った。イスラエル信仰の根源をなすエジプト脱出を祝うので，この祭りを忠実に祝うよう聖書記者は強調している（出 12：24，王下 23：21，エズ 6：19 ― 22)。キリストも受難の前夜これを祝われた（ルカ 22：16)。初代教会は，キリスト自身をこの犠牲の小羊と見なし（1 コリ 5：7)，神の民の死から生命への過越を祝った。
◆除酵祭（じょこうさい）　過越祭に続いて 7 日間守られるユダヤ教の祭日。エジプト脱出を記念するため，当時の故事に倣って，パン種を入れないパンを作ったことから，この名称で呼ばれた（出 12：14 ― 20)。ニサンの月の 15 日から 7 日間である。太陽暦では 3 月末から 4 月初めごろ（マタ 26：17，使 12：3，20：6)。

◆七週祭（ななしゅうさい）　一「刈り人れの祭り」の項を見よ。
◆刈り入れの祭り（かりいれのまつり）　ユダヤ教の三大祭りの一つ。「主の過越祭」（新約：過越祭）から数えて 7 週目、すなわち五十日目に祝われていた小麦の刈り入れの祭り（出 23：16)，「七週祭」ともいわれた。しかし、後代になると，モーセがシナイ山において神から律法を授けられたことも合わせて記念されるようになった。ギリシア語では「五十」を意味する「ペンテコ

ステ」（新共同訳では五旬祭）と呼ばれ，この日に使徒たちの上に聖霊が降った（使 2：1 以下）。
◆五旬祭（ごじゅんさい）　ユダヤ教の三大祭りの一つ。麦の収穫を祝う祭りであったが，同時にモーセがシナイ山において神から律法を授けられた記念の祝祭でもあった。過越祭から数えて 50 日目に当たるのでこの名で呼ばれた。ギリシア語で「ペンテコステ」（五十の意）。旧約では「週の祭り」あるいは，「七週祭」と呼ばれる。

◆仮庵祭　（かりいおさい）　ユダヤ教の三大祭りの一つ。ティシュリの月の 15 日から 7 日間（太陽暦の 10 月初旬ごろ）行われる。後代には 8 日間に延長された．イスラエルの民が荒れ野で天幕に住んだことを記念し，仮庵を作って祭りの間そこに仮住まいをしたことに由来する名称。秋の果実の収穫祭でもあった（レビ 23：34 以下，ヨハ 7：2）。イエスの時代には，仮庵祭の期間中、毎日シロアムの池の水を黄金の器にくんで神殿に運び，朝夕の供え物とともに祭壇に注ぐ行事が行われた。ヨハネによる福音書 7：37，38 はこの「水」に関係がある。

◆バアル　　アシェラやアシュトレトと並んで，古代パレスチナの住民が礼拝した神の名。本来は「主」「所有者」などの意味であったが，土地の所有者，豊作をもたらす神の固有名詞となった。エリヤをはじめ旧約の預言者は，バアル宗教と絶えず戦わねばならなかった（王上 18 ～ 19 章，ロマ 11：4）。

３. 王国時代（前 1020-587）　士師時代の末期…サムエル誕生(ｻﾑ上１章)

士師時代の末期
サムエルの誕生（サムエル記上１章）
祭司エリと少年サムエル（サムエル記上３章）
神の箱（契約の箱）奪われる（サムエル記上４章）→　神の箱の帰還
民、王を求める（サムエル記上８章）
サウル、油を注がれて王となる（サムエル記上９章）

●サムエル－預言者、宗教的指導者、紛争の調停者、自衛戦争の指導者
（ペリシテ人、パレスチナに進出、イスラエルを圧迫 前 1060 頃）
●サウル王国の成立（ｻﾑ上 8-12 章）（前 1012-1004　20 年間?）
メシアの原型「油を注ぎ、イスラエルの指導者(君)とせよ」(ｻﾑ上 9:16)
●ダビデ王国（ｻﾑ上 16 章－ｻﾑ下 6 章）（前 1004-965　40 年間?）
ダビデ、油を注がれる（サムエル記上 16 章）
ダビデとゴリアト（サムエル記上 17 章）
ダビデに対するサウルの敵意（サムエル記上 18 章）
ダビデ、ユダの王になる（サムエル記下２章）
ダビデ、イスラエルとユダの王となる（王国統一）（サムエル記下５章）
神の箱をエルサレムへ運び上げる（聖所－エルサレム）（サムエル記下６章）
ナタン預言（サムエル記下 7 章）　　ダビデ台頭史
ウリヤの妻バト・シェバ（サムエル記下 11 章）を妾とする
（ナタンの叱責）　　ソロモンの誕生（サムエル記下 12:24）
●ソロモン王国（前 965-926　40 年間）王上 11:42
ソロモン、油を注がれ王となる（列王記上 1:39）

ソロモンの知恵・統治・繁栄（列王記上３章、４章）
エルサレム神殿の建築(前 962-955(7 年間)) （列王記上 6 章）
宮殿(王宮)の建築(13 年間)　　（列王記上７章）
※経済的繁栄、知恵文化の発展　　ダビデ王位継承史
※諸外国との同盟、　　（ヤハウィスト(Ｊ)文書成立？）
政略結婚による異邦人の妻たち、エルサレムに住む
※異教的祭儀の導入
（北イスラエルの犠牲）

◆ペリシテ人　古代カナン南部の地中海沿岸地域周辺に入植した民族集団。ガザ、アシュドド、アシュケロン、ガト、エクロンの 5 つの自治都市に定着して五市連合を形成していた。古代イスラエルの主要な敵として知られ、聖書の『士師記』や『サムエル記』で頻繁に登場する。特に、士師サムソンの物語や、戦士ゴリアテと戦ったダビデの物語などが有名である。ペリシテはパレスチナの名称の由来ともなった。

現在のヨーロッパ諸語では、ペリシテ人とは「芸術や文学などに関心のない粗野で無趣味な人」の代名詞として使用される。

ペリシテ人は紀元前 13 世紀から紀元前 12 世紀にかけて地中海東部地域に来襲した「海の民」と呼ばれる諸集団を構成した人々の一部であり、エーゲ海域とギリシアのミケーネ文明を担った人々に起源を持つとする説が有力である。

◆メシア　「油を注がれた者」の意で旧約聖書では 39 回用いられている。イスラエルでは「王」（サム下 2：4）「祭司」（出 29：7）が，就任式のとき油を注がれた。後に「油を注がれた者」は正しい治世をもって国を治める理想的王を示すようになり（イザ 11：1-10），更に神の決定的な救いをもたらす「救い主」を指すようになった。新約時代の人々は政治的解放をもたらすメシアを待望していたが，イエスはそれを拒否し，十字架の死によって人々を罪から救うメシアであることを主張された。新約聖書は、イエスがこの意味のメシアであることを主張し．イエスに「キリスト」（メシアのギリシア語訳）という名称を付した（マタ 1：1，16：16）。

◆預言者（よげんしゃ）　神の啓示を受け，神の名によって語る人。王国分裂後の預言者たちの言葉は，後に文書にまとめられ，いわゆる預言書として編さんされ，ヘブライ語の旧約聖書には，その第 2 部に集録され，古代のギリシア語訳，ラテン語訳．および大多数の現代語訳には，旧約聖書の最後の部に収録されている。新約では，旧約の預言者個人を指す場合（マタ 3：3，4：14）と，「律法と預言者」というように，旧約の第 2 部を意味する場合がある。また．初代教会には使徒の次に教師　奇跡を行う者などと並んで預言者がいた（1 コリ 12：28）。これは神の霊によって預言をする能力を与えられた人であった（1 コリ 14：1）。

◆幕屋（まくや）　モーセがシナイ山で十戒を授与された後，神の命令に従って作ったテントの礼拝所。契約の箱が安置され，また神が現れてモーセと語らう場所になったので「臨在の幕屋」とも呼ばれた。イスラエル民族の荒れ野の旅に伴って移動した（出 25 章　民 9：15，使 7：44，黙 15：5）。

◆至聖所（しせいじょ）「聖の聖」，つまり最も神聖な場所の意味で，神殿の一番奥の間を指す。そこには、2 体のケルビムの像と契約の箱とが置かれていた（出 25：18 － 22，王上 6：23 － 28)。聖所との間は幕で仕切られており，大祭司が年に一度贖罪日に入るはかは，だれも入ることが許されない場所（レビ 16 章，ヘブ 9：7)。

◆ケルビム　旧約には，ヘブライ語で単数「ケルブ」，複数「ケルビム」の両方の形が記されているが，新約ではヘブライ人への手紙 9：5 に 1 回だけ、ギリシア語音訳で「ケルビン」（アラム語形語尾）とある。人間の顔を持ち，翼を持った天的な動物と想像され、創世記 3：24 では楽園の番人，詩編では神の乗り物（詩 18：11）と見なされているこ。神殿の至聖所には、契約の箱の上に一対のケルビム像が置かれていた（士上 6：23 以下)。
　ここからして神は「ケルビムの上に座する者」と呼ばれている（詩 80：2)。イザヤ 6：2 以下に登場するセラフィムも何じく天的な存在と考えられている。なお新共同訳では，単数形の場合も複数形の場合も，原則として「ケルビム」という訳語を用いた。

◆契約の箱　（けいやくのはこ）　　神はイスラエルと契約を結ばれたが，そのしるしである十戒を刻んだ 2 枚の石の板を納めた箱（申 10：1 － 5)。純金で覆われた木製の箱であったといわれる。ソロモンが神殿を建てたとき，この箱を至聖所に納めた記録があるが，ネブカドネツァルのバビロン軍が神殿を取り壊した後は所在不明（王上 8：1，ヘブ 9：4，黙 11：19)。

◆神殿（しんでん）　新約では，はとんどすべての場合，エルサレムの神殿を指す（他 19：24 にあるエフェソの女神アルテミスの神殿などは例外)。イスラエルの礼拝・祭儀の場として初めてエルサレムに神殿を建造したのは旧約のソロモン王であった（王上 5 ～ 7 章参照)。この神殿はバビロン王ネブカドネツァル（＝ネブカドレツァル）に破壊された。その後，バビロンの捕囚から帰った人々の手で質素な神殿が再建された（エズ 5：6 ～ 6：12）が，紀元前 20 年ごろヘロデ大王は大規模な修理拡張工事を始めた。イエスの時代には，周囲に回廊を巡らした広い境内と，白い大理石の美しい本殿を持つ，りっぱな建造物であった（マタ 24：1，マコ 13：1，2，ヨハ 2：20 参照)。

４．王国分裂（前 926）　（列王記上12章）

ソロモンの子**レハブアム**　と　ネバトの子**ヤロブアム**（ソロモンの配下）
ヤロブアム　→　北イスラエル（10 部族）
レハブアム　→　南ユダ（１部族）
■ヤコブ(イスラエル)の息子たち（創世記35：23-26、歴代誌上２：１－２）
　レア（妻）　→ ルベン、シメオン、レビ(祭司)、ユダ、イサカル、ゼブルン
　ラケル（妻）→ ヨセフ、ベニヤミン
　ビルハ（召使い）→ ダン、ナフタリ
　ジルパ（召使い）→ ガド、アシェル
●北（イスラエル）王国（前926-722）　10 部族
（ヤロブアム一世→ナダブ→バアシャ(ﾊﾞｼｬ)→エラ→ジムリ→オムリ→

アハブ→アハズヤ→ヨラム→エヒウ→エホアハズ(ﾖｱﾊｽﾞ?)→ヨアシュ→
ヤロブアム二世→ゼカルヤ→シャルム→メナヘム→ペカフヤ→ペカ→
ホシェア）

前 722　アッシリアに滅ぼされる。サマリア陥落（北王国の滅亡）

預言者――エリヤ、エリシャ、アモス、ホセア

(ｴﾘﾔ伝の集成)800 頃?　↓ﾔﾛﾌﾞｱﾑⅡ　前 787-747

以後、記述預言者

（エロヒスト(Ｅ)文書成立？）

●南（ユダ）王国（前926-587）　ユダ部族

（レハブアム→アビヤ(ム)→アサ→ヨシャファト→ヨラム→アハズヤ→
アタルヤ→ヨアシュ→アマツヤ→ウジヤ(ｱｻﾞﾘﾔ)→ヨタム(摂政)→ヨタム
→アハズ→ヒゼキヤ→マナセ→アモン→ヨシヤ→ヨアハズ(ｴﾎｱﾊｽﾞ)→
ヨヤキム(ｴﾎﾔｷﾑ)→ヨヤキン(ｴﾎﾔｷﾝ)→ゼデキヤ）

前 587　バビロンに滅ぼされる。エルサレム陥落（南王国の滅亡）

預言者……イザヤ、ミカ、エレミヤ、エゼキエル(ユダヤ教の父)

↓　　捕囚

ヨシヤの宗教改革（申命記改革）前 621

バビロン捕囚

第１回（前 598）　第２回（前 587）　第３回（前 583）

◆預言者（よげんしゃ）　神の啓示を受け，神の名によって語る人。王国分裂後の預言者たちの言葉は，後に文書にまとめられ，いわゆる預言書として編纂され，ヘブライ語の旧約聖書には，その第 2 部に集録され，古代のギリシア語訳，ラテン語訳．および大多数の現代語訳には，旧約聖書の最後の部に収録されている。新約では，旧約の預言者個人を指す場合（マタ 3：3，4：14）と，「律法と預言者」というように，旧約の第 2 部を意味する場合がある。また．初代教会には使徒の次に教師　奇跡を行う者などと並んで預言者がいた（1 コリ 12：28)。これは神の霊によって預言をする能力を与えられた人であった（1 コリ 14：1)。

◆捕囚（ほしゅう）　古代オリエント世界に多く見られた占領政策の一つで，戦勝国は敗戦国の指導者、軍人　ならびに有力　有益な住民を自国内に強制移住させて，謀反の再発を予防するとともに，自国の発展を図った。北イスラエル王国では，アッシリア王ティグラト・ピレセル三世（前 744 － 727 年在位）の治世下における捕囚を皮切りに数次行われた（王下 15：29, 17：5, 6)。しかし一般に「捕囚」というときは，バビロニア王ネブカドネツァル（前 605 － 562 年在位）によって前 598 年から 3 回にわたって行われた南ユダ王国のそれを指す（王下 24：14-16, 25：11. 12, 21)。この捕囚で約 4600 人の成人男子がバビロニア国内に移住させられ（エレ 52：30)，前 538 年ペルシアの王キュロスの帰還命令発布までの約 60 年間，外国での生活を強いられた（詩 137)。バビロンに移住した人たちが，いわゆる「残りの者」（ゼファ 3：12．13）となってイスラエルの復興の中核となった。

【北王国イスラエルの王】	預言者	【南王国ユダの王【】
ヤラブアム１世（922-901）		レハブアム（922-915）
		アビヤム（915-913）
ナダブ（901-900）		ア　サ（913-873）
バシャ（900-877）		
エ　ラ（877-876）		
ジムリ（876）		ヨシャファト（873-849）
オムリ（876-869）		
アハブ（869-850）	エリヤ（869-845）	
アハズヤ（850-849）		ヨラム（849-842）
ヨラム（849-842）		アハズヤ（842）
		アタルヤ（842-837）
イエフ（842-815）	エリシャ（853-793）	ヨアシュ（837-800）
ヨアハズ（815-801）		
ヨアシュ（801-786）		
ヤラブアム２世（786-746）	アモス（752-738）	アマツヤ（800-783）
		アザルヤ（783-742）
ゼカルヤ（746-745）		‖
	ホセア（746-735）	（ウジヤ）
シャルム（745）		ヨタム(摂政)（750-742）
メナヘム（745-738）		ヨタム（742-735）
ペカフヤ（738-737）	イザヤ（742-701）	アハズ（735-715）
		ヒゼキヤ（715-687）
ペ　カ（737-732）		マナセ（687-642）
ホシェア（732-724）	ミ　カ（736-693）	アモン（642-640）
＜北王国滅亡＞		ヨシヤ（640-609）
サマリア陥落（722）		ヨアハズ（609）
	エレミヤ（626-586）	ヨアキム（609-598）
		ヨアキン（598-587）
		ゼデキヤ（597-587）
	エゼキエル（597 ～）	＜南王国滅亡＞
（表の年代はすべて紀元前）		エルサレム陥落（587）

５. 捕囚時代 → ペルシア時代（前 587-538）約 50 年間

捕囚後のユダヤ人 － 次第に宗教的教団民族の形を形成、強化
（預言者の働き、歴史編纂）
前 550 頃、歴史記述完成？

歴史編纂……申命記（律法）に始まり、ヨシュア記、士師記、サムエル記、
列王記など。その前史としては、既に存在していたヤーウィスト文書、
エロヒスト文書を加え、更に、エレミヤ、エゼキエル書等も編集。

前 559　キュロス、ペルシア独立、王となる(前 559-530)
第二イザヤ（ｲｻﾞﾔ 40-55 章）…解放の到来を告知
前 539 秋　キュロス王、バビロン入城
前 538　　キュロスの勅令（帰還命令）　代下 36:23、ｴｽﾞﾗ1:2-4
捕囚民のエルサレム帰還事情（エズラ記）
（神殿の建築工事(前 537)…妨害(サマリヤ人など)、中断）ｴｽﾞﾗ4 章
前 515　第２神殿完成　（ハガイ、ゼカリヤ、ゼルバベル、イエシュア）
祭司制度の再確立　　（ｴｽﾞﾗ 5 章、6 章）
前 458(異説 428)　エズラの改革(律法中心の共同体秩序化、雑婚の解消)
（律法体制の確立→ユダヤ教の始まり？）
前 445　ネヘミヤの改革(負債の免除、エルサレムへの強制移住、安息日の厳守)

モーセ五書の最終編集……エズラに始まるエルサレムの祭司門閥
（創・出・レビ・民・申）　　↓
祭司文書（Ｐ）を付加（祭司法典）

◆既に、ヤーウィスト文書（ユダ＝エルサレム、前 9 世紀頃、族長物語等)、エロヒスト文書(北イスラエル、前 800 頃、創 22 章、出 32 章等)、申命記、契約の書（律法の書、申命記 12-26 章)、神聖法典（ﾚﾋﾞ 17-26 章）などの文書がまとめられていたが、祭司文書が、最終的に五書全体をまとめあげた（前 400 頃)。
ヨブ記（前４世紀後半？）　ルツ記（捕囚期､中､後？）　ヨナ書（捕囚後？）
歴代誌（前 400 頃？）　ダニエル書前半

◆ペルシアの支配下の時代（前 538-333）約 200 年間

６. ギリシア（ヘレニズム）時代（前 333 － 63）

アレクサンドロス大王 → ヘレニズム体制（マケドニアの覇権確立）
（前 333　イッソスの戦いで、ダリウスⅢ(前 336-331)を破り、翌年は、シリア、パレスチナ地方を通って、エジプト占領、前 323 急死）
分　裂　シリアを中心とするセレウコス王朝
エジプトを中心とするプトレマイオス王朝
前 301 年　パレスチナはプトレマイオス王朝の支配下

前 198 年　パレスチナはセレウコス王朝の支配下(アンティオコスIII、ユダヤに寛大)
↓
アンティオコス四世エピファネス（イスラエル神殿侵入、ユダヤ人迫害強化）
マカベア戦争（前167－162）←ユダヤ教禁止、神殿にゼウス祭儀導入
ハスモン王朝（前 142-63）→ 政治的独立

エステル記　箴言(前 300-250?)　コヘレトの言葉(前 250-200?)
雅歌(前 3 世紀初?)　ダニエル書後半(前 164 少し前)

「モーセ五書(トーラー)」前 250-200 頃、アレクサンドリアでギリシア語に翻訳
７０人訳聖書（セプチュアギンタ　ＬＸＸ）の成立
この頃、預言書（ナービーム）８巻も正典化（前 130 年頃）
前の預言書……ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記
後の預言書……イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、１２小預言書

【参考】
（**※紀元 90 年頃　ヤブネ(ヤムニア)会議 → ユダヤ人の旧約聖書正典を確定**）
（紀元 70 年　ティトゥス、エルサレム征服、神殿炎上、エルサレム陥落）
（ヤブネ(ヤムニア)に議会(ｻﾝﾍﾄﾞﾘﾝ)、ユダヤ教の宗教生活、会堂(シナゴーグ)に移る）

前２世紀－１世紀のユダヤ
敬虔派（ハシディーム）→　エッセネ派…死海付近（クムラン教団？）
ファリサイ派…会堂（シナゴーグ)、ディアスポラ
サドカイ派…神殿（保守的）

7．ローマ時代（前 63-）

ポンペイウス、エルサレム占領(前 63)－ローマの支配下
ヘロデ、ユダヤ王として君臨（前(40)37 ～前 4）
イエス誕生（前 7 ～前 4）
「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。」(ﾏﾀｲ 2:1)